
木刀と破滅の使者

大月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木刀と破滅の使者

【Nコード】

N6291I

【作者名】

大月

【あらすじ】

主人公の富山幹也は、剣に生きる現役の高校生だ。夏休みのある日に、海を満喫していたのだが、海中から突如現れる謎の化け物。そしてそれに巻き込まれた状態で異世界に連れて行かれてしまう。持っているものは木刀一本。己の刀を頼りにして異世界から元の世界に戻るために幹也は奔走する。

プロローグ：異世界へ

真夏のビーチ。照りつける日差しと、波の音、はしゃいでいる海水浴者たち。そんな場所に、富山幹也は仲の良い友達と一緒に海水浴にやって来ている。

しかし、はしゃぎ続けるほかの海水浴者や友達たちとは、彼の楽しみ方は違ったものだ。

「お前……なんで海に服着て出てきてるの？　そしてなぜそんな足場の悪い場所に、木刀なんかもって？」

「これが俺の楽しみ方だ。文句があるか？」

幹也は、不安定でツルツルのごつごつした岩場の、その中でもより不安定などがった岩の上に立って、木刀を構えている。そして精神を集中し、時折やってくる高い波を木刀で切り裂き続けている。

そんな幹也に今話しかけているのは、神谷春彦。幹也のクラスメイトで、親友といえる仲だ。だがお互いの考え方はまったく一致しない。

剣の道にひたすら懸命な幹也。そして遊び人の春彦。ともに同じ人物を師と仰ぎ、剣を振るっている門弟どうしでもあるのだが、剣への思いだけはまったくもって似つかない。

「いや、まあ文句もねえが。たまにはパーっと遊んだりしねえか？」

「まあそれもそうだが、年中遊んでいる春彦に言われてもどうもな」

「ああーっ！ もういい、一生刀を振ってる。つーかこの平和なビーチで何を斬るんだよ」

「ただの護身刀だ。それにいつ何時敵は現れるか分からない」

「はあ〜……」

師曰く、彼らは足して割ると丁度いい。春彦はいい加減すぎるのだが、幹也は剣のこととなると、堅すぎる面がある。

この平和な時代に、突然の敵襲に対して気を張っている幹也には、長年一緒にいる春彦もあきれてしまった。

だが敵襲は、実際にすぐそこまで迫っている。しかしそのことに気づくものはいない。

「だいたい、この近代社会で辻斬りも合戦もねえっての」

「分からんぞ、それに敵がそういった類のものであるとは限らんしな」

「はあ？」

「例えば……」

幹也は具体例を挙げようと、少し考えたが、それを彼が口にする前に、彼らの前にそれが現れた。

海の水が盛り上がり、大量の海水を持ち上げながら何かが海から出てくるのだ。彼らはその時に出た轟音でその存在に気づいた。

「これとか？」

「……っ！　なんだこれ！？　おい！　逃げんぞ！　まさか斬るとか言わねえよな」

「無論。斬る」

「アホかあ！」

一緒に持ち上げられていた海水が、海に戻っていくと。その実態が見えてきた。下半身は海の中なようで見ることができないが、上半身だけでそれがもはや地球上に存在しないであろうものであることが容易に想像できた。

真つ黒な体に、赤く光る何かが浮かび上がっている。一見して血管のようだが、それは何か文字のようだった。

まさに化け物だった。これには幹也も体が固まってしまう。

「しまったっ！」

足場が悪い岩場で、冷静を欠き、幹也は海に落ちてしまった。春彦は本能に従ってその場から逃げ出したが、化け物は、それよりはるかに速く移動し、春彦を追い抜かした。

「……ああ？　襲ってこねえじゃん」

この化け物は、幹也と春彦のことを認識していない。ただ化け物自身の都合で、あの場所から現れて、海から離れようとしただけのことである。

ただその化け物の意思とは別に、化け物の下半身は一向に現れず、胴体が伸びる形となっている。

何とか海から這い上がった幹也は、その光景を見て思った。この化け物は春彦を襲っている。

「うおお！」

不安定な足場で、どうにかジャンプし、化け物の胴体を木刀で幹也は斬りつけた。だが見た目上も、そして本質的にも化け物はまったくダメージを負っていない。

だがそれと同時に、化け物は化け物自身の都合でその場に猛スピードで帰ってきた。それは幹也からすれば、狙う対象が自分に移ったと解釈せざるをえない。

「ぐっ……！」

化け物はそのスピードのまま幹也に激突し、その巨大な体で幹也の逃げ道を塞いだまま海中へと戻っていった。

実際には海中に存在する、化け物をこの世界へと招いた次元の扉へと。

第一章：王国の圧政

「いつッ……！」

幹也は頭痛で目を覚ました。化け物に海中に引きずり込まれた時点で意識を失っていた幹也は、現在広い草原の上に寝転がっていた。まだ服が濡れている。それはやはりここが現実であることと、それほど時間の経過が無いことを示していた。

手には木刀がしっかりと握られている。剣の道を生きるものにとって刀とは命である。幹也も剣の道を志すものであるということである。

「どこだ……」

周りに人の気配は無かった。このままここで寝ていても事態は好転しないと考え、幹也はそこから歩いて移動してみることにした。少し進んだところで、目の前に何かが現れた。

この世界の生き物であるのは確かなのだが、言葉が通じるとは思えなかった。

「明確な敵意を感じるな」

それは巨大な蛇だった。幹也のいた世界での巨大な蛇とは比べ物にならない。全長20メートルはあろうかという大蛇だ。

「ふふっ、いいだろう。俺の剣術が、どの程度通じるものか」

大蛇の動きは鈍い。その理由は単純に、幹也のことを舐めているからだ。自分よりはるかに小さい生き物に対して、野生の恐怖というものはまったく働いていない。

それを好機と、幹也は蛇の両目の中心辺り。人間でいう眉間、脳に直接衝撃が届く場所に剣を振り下ろした。ゴスツという鈍い音がして、幹也の手にも衝撃の反動が返る。

完全に敵としてみていなかった、小さい生き物の攻撃により、命の危機をようやく感じた大蛇は、その場で体をくねらせ暴れまわった。

その太い胴体が、偶然幹也の胴をなぎ払った。大蛇の怪力をもろに受けて、幹也は草原を転がった。

「……気絶、するものか……！」

幹也はその場でどうにか立ち上がり、大蛇を見た。幹也を完全に敵とみなした大蛇は、幹也のほうへと高速で移動している。

そして今度は大蛇の頭が幹也に正面から激突した。だが、今回は幹也はあえてよけなかった。敵のほうが速いという状況で、確実に一撃を入れるためにはこうするほか無いのだ。

幹也は木刀を、大蛇の眼球に突き刺した。

大蛇は痛みに暴れまわったが、眼球がつぶれることは無かった。

「硬いな。石を突いたようだった」

大蛇は怒り狂い、巨大な胴を幹也へとたたきつけようとした。

幹也にはこれを止める術もよける術も無い。幹也は死を覚悟したが、次の瞬間にも幹也は立っていて、大蛇は草原に倒れていた。

「大丈夫かあんた！」

幹也は、助けに入った男よりも、その男の手から放たれた赤い光球を見ていた。そしてその光球が、大蛇を一撃の元に倒したのだ。

「あんなのに力で挑むなんてどうかしてるぜ……」

幹也のほうへと駆け寄ってきた男は、真っ赤な髪に、真っ赤な瞳。目つきが悪く、長身でガタイがいい。少し不良っぽいという感じだ。その男が、幹也を見て表情を一気に強張らせた。大蛇に光球を放つときにもしなかつたような表情だ。

「あんた……何者だ？」

「何者といわれてもな。名前は幹也だ」

「ミキヤか、なぜここにいる。どこから来た？」

「ここにいる理由は分からん。俺も来たかったわけではない」

それは嘘偽りの無い事実であるが、男がそれをあっさりと信じるわけも無い。

「……とにかく、武器を置いてもらおう」

「俺が名乗ったんだ、お前も名乗るべきだろう」

「……侵入者には大層な口の利き方をする。まあいい、俺は

ヴァル。灼炎の民の自治区の警備長だ。俺にはお前のような怪しいやつを始末する義務があるんだ」

ヴァルと名乗ったが、彼はいぜん敵意をむき出しにしたままだ。仕方がなく、幹也が木刀を放り投げると、ヴあるはそれを持ち上げて確認する。

何の仕掛けも無いただの木刀である。

「……木の、棒か？」

「刀だ、木の刀と書いて木刀だ」

「ふん、どうでもいい。とにかく着てもらおう、そこで詳しく話してもらおう」

そしてヴァルにつれられて幹也は草原を進み、民家のようなもの、おそらく民家だろうが幹也の見たことの無い建物だ。それがちらほらと見え始めるようになり、その中でも一際目立つ大きな建物。

その中に幹也は入っていった。

そして大方の事情を説明した。

自分がおそらく別の世界から来ていること、そして自分が人間であるということ。話を黙って聞いていた他の灼炎の民たちも、ヴァルも、ほとんどあきれ気味で聞いているのだが、人間、という言葉と、黒い化け物のところを説明したところで、彼らは真剣な表情になった。

「……人間、その黒髪に黒い眼は人間という種族の特徴なのか？」

灼炎の民の1人が疑問を投げかけた。

この世界には数多くの種族が存在している。

しかし、人間という種族と、黒い髪と黒い瞳を持つ種族は文献にのっている程度で、存在自体が信じられていなかった。

髪の色というのは外見的特長だけでなく、その者の使える魔法の属性を表している。

魔法を使うのに必要となるものが、マナという。マナはこの世界には存在し、元の世界にあったかは分からない。マナとは一種類しか存在しないものだが、そこからそれぞれの属性に変化させる。

そのこうていには、向き不向きがあり、火の魔法と得意とする灼炎の民のような種族なら赤。水の魔法なら青。風の魔法なら緑。電気魔法なら黄色といった具合である。

魔法の種類はこの通りだけではなく、他にも存在する。

この世界の基本としてこれらのことを幹也は説明された。

「種族の特徴というか、俺はむしろ黒以外の髪を持つ人をめったに見ない」

「……」

彼ら灼炎の民が、これほどまでに幹也を警戒している理由は2つある。

1つはここが自治区であり、国からの圧政に抵抗し続けている地域だからだ。国からの使いのものである可能性はある。疑われても仕方が無い状況でヴァルに発見されているのだ。

そしてもう1つはその髪の色に起因する。

「髪の色と眼の色が、そのものの魔法的特長も示すことは説明したが、その中でも直接魔法的特長を示さない特別な場合がある。その1つが白い髪だ。王族たちはこの色を持っている。まあこれは白い髪の種族はすさまじい魔法力があるということを示しているともいえる。

そしてもう1つがお前の持つ黒い髪だ。文献にのみ残されるその髪の色は、破滅を象徴し、破滅の使者と呼ばれる種族のみが持っていたものだ」

「なるほど、この髪の色はこの世界ではそうも奇異なものなのか」

「そうだ、警戒されて当然ということだ」

「……しかし、俺は何も破滅をもたらすつもりも、お前たちに危害を加えるつもりも無い。それに俺からも1つ気になることを質問させてもらって良いか？」

「いいだろう、なんだ？」

「あの黒い化け物は何だった？ 知っているのだろう」

「ああ、知っている。そいつこそが俺たちの最大の敵であり、この世界の最大悪だ」

「最大悪？」

「そうだ、まあその化け物には意思は無いのだろうが、化け物を操っている男がいる」

「誰だ？」

「国王だ。まあ証拠は無いが、ほぼ間違いないはずだ」

「国王が、世界の最大悪を率いているのか？」

「そうなるな。俺たちが王政に反発し続けるのもそのためだ。まあ、限界も近いのだが……」

ヴァルは話し終わると顔を伏せた。それはヴァルだけではなく、その言葉を聴いていた灼炎の民たち全員が同じように顔を伏せている。

何か良くない状況であることは、事情を良く知らない幹也でもすぐに分かる。

その直後、へやの扉が乱暴に開かれた。そして1人の灼炎の民が飛び込んできた。

「奴らだ！ ヴァル！」

「くっ、こんなときにか……悪いがミキヤ、待っていてくれ」

「いや、俺も行こう」

「魔法が使えないやつが、戦力になるか！」

「戦うとは言っていない。少し気になるだけだ」

「余計なことはするなよ……」

ヴァルは建物を飛び出して、報告に来た灼炎の民と一緒に走り出した。そしてその後を幹也が追っていく。

門の戦闘

灼炎の民たちの自治区の入り口、そこには大きな門が築かれていて、門には灼炎の民による独自の結界魔法が施されていて、王国の軍隊が進軍することは不可能だった。

少し前までは。

今では魔法軍隊により少しずつ結界は削られていき、突破されるのも時間の問題となってしまうている。

この日も、門の前には100人はいようかという軍隊が攻めてきていた。

「んー、ここも手こずったけど、もうお終いっばいね」

その軍隊の先頭にいる男、名前はクロマ。王国魔法軍隊の部隊長だ。

彼はもはや崩れるのを待っただけという状況になった大きな門を見て満足そうに微笑んでいた。

「もー一押し。僕の魔法で消しちゃおっかな」

髪の色は透き通った翡翠色。薄い翡翠の色は冷気を伴う風と水の魔法を使うことを示している。そしてその色がより透き通っていればいるほど、氷の魔法としても力の大きさを示している。

クロマが手を挙げ、その手の中に小さな氷のつぶてが出現した。そしてそれが上昇しながら徐々に大きく成長していく。彼が手を振り下ろすと、氷の大きくなったつぶては、門に向かって飛んだ。だがそこに巨大な赤い光球が直撃し、氷のつぶてを破壊する。

「……ターゲット発見。ヴァルくん、僕と遊ぼうか」

クロマが魔法を発動させる。

先ほどの氷のつぶてより大きなつぶてが2つ、クロマの両の手のひらの上に出現する。

「さて、かわせるかな？」

「はっ！ 撃たせねえけど？」

ヴァルも先ほどのものよりも倍近く巨大な光球を出現させ、形が出来上がると同時にクロマに向けて高速で撃ちだした。

クロマはその攻撃を氷のつぶてで止める。氷のつぶては解けて砕けちった。

「さすが灼炎。火を使わせたらかなりのレベルだね、でも、これ以上は使わせないよ」

クロマが足元から大量の水を発生させて、ヴァルに向けて津波のように攻撃する。威力はさほど無いが、範囲が広く、かわしきれないでヴァルは波にのまれた。

だがすぐに体勢を立て直し、その場に立ち上がった。

「こんなので動きが止めれると思ったか!？」

「思っていないよ。ま、止めるけど」

瞬間、クロマの周りの直物が凍りつき、風に揺れることをやめた。

「凍える息吹」
フリザード

冷気の塊が、クロマの体から放たれ、ヴァルの周囲を広範囲に包み込んだ。

水気を帯びていた辺りは凍り始める。それは水に濡れたヴァルの体も同じことである。そして動けなくなったところに、今度は液体の状態の大量の水が襲い掛かる。

「水玉の檻」
アクアラップ

大量の水は、球状になってヴァルを包み込み、完全に身動きを奪った。掴むことのできない水の檻からは、力では脱出ができない。そのヴァルのピンチに、木刀を持ったミキヤが駆けつけた。木刀で水を斬り裂き、ヴァルを水の檻から引っ張り出した。

「水を斬る修行が役に立つとはな」

「あぶねえだろ！ 何してる！」

「助けってやったのにそれはないだろぐああっ！」

「割り込み厳禁だよ？ まあいや。今回は特別にきみから殺し上げる」

もう一度クロマが水玉の檻を使い、今度はミキヤが水の檻に閉じ込められた。ヴァルは水の檻に手を突っ込んだ。しかしミキヤにはその手は届かない。

「無駄だよー……あれ？ 魔力が……」

水の檻は、ミキヤを閉じ込めてすぐに、檻としての力を失い、水となって地面に落ちた。

「黒い髪、一体きみは誰だい？」

「エクスプロード憤怒の爆撃！」

完全に意識がミキヤの黒い髪に向かっていたクロマに向かって、ヴァルは自身最強の魔法による攻撃を仕掛けた。憤怒の爆撃は、極限まで圧縮した熱と炎の塊。魔力によって固められた熱球は、衝撃を受けて破裂し、急速に酸素を消費して大爆発を起こす。

シンプルな構造だが、ヴァルの魔力をもってすればその破壊力はすさまじい。

轟音とともに辺りが熱気に包まれる。

「すごいな、これが魔法というものか」

「油断するなよ、あいつはまだ」そうそう、まだまだだよー」

クロマはまったくの無傷でミキヤの前に姿を現した。

「でも……やーめた。なんか変なの出てくるし、帰るね」

クロマは言い終わると、体が水になって消えた。

クロマの帰るという意味は、軍隊にもいきわたっていたようで、王国軍隊は全員撤退していった。

「魔法というのは、ほんとにすごいものだな」

「ま、そうだな。なんにしても助けてくれたことには感謝する。とりあえず戻るぞ」

ミキヤとヴァルは、もう一度民家のある町のほうへと戻っていた。

クロマは灼炎の民の居住地区から一番近い都市、グロリアにある王宮別邸までやってきていた。王宮別邸といっても、そこは軍備施設に他ならない。

グロリアの王宮別邸を管理しているのは、トゥーノという黄色い髪をした男だ。古くから王族に仕えてきた種族のエリートだった彼は、このグロリアの別邸管理を任せられることとなっている。

そのトゥーノには、このグロリアにおいて王に近い権限を与えられている。

トゥーノがクロマを呼び出した理由は、クロマの撤退に疑問を感じたからだ。

クロマの引き連れていた部隊は、灼炎の民の居住地区を確実に落とせる戦力を保持していた。つまり撤退する必要は無いはずだったのだ。

しかしクロマは撤退した。ミキヤというイレギュラー因子によってだ。

「んー、まあ呼ばれた理由は分かるよ。なんかね、黒い髪のやつに邪魔された」

「黒髪……まさか、破滅の使者……」

「いやーそれはないと思うよー。もしそうだったら僕死んでるっぼくない？」

「そうでないとするれば、そいつは撤退の必要があるほど強かったのか？」

「どうだろうねー、僕でも勝てたかもしれないし、王でも負けたかもしれない」

それは、クロマの感じたことそのままだった。出会ったことの無い異質な能力。クロマは戦闘中に魔力が突然消されるという違和感を感じた。

「とにかく今のままじゃ、どんな魔法を使うのか検討つかないな」

「……」

「だいじょーぶ、次はバッチリ倒してくるから」

クロマは笑顔でそう言い切って王宮別邸を後にした。

クロマの率いる王国軍隊を撤退させたミキヤとヴァルは元の建物へと戻ってきていた。

だが戦いの前のように、他にも見張りの灼炎の民がいるわけではなく、ミキヤとヴァルの一対一の状況だ。ヴァルは一度の戦いでミキヤのことを大方信用していた。

しばらく何も話さずに、お互いそれぞれに考え事をしていたが、ミキヤが第一声を発した。

「俺も戦おう、俺の目的は元の世界に帰ることだ。王国との戦いが避けられないなら俺は1人でも戦わねばならない。利害の一致だ、共に王国と戦おうではないか」

「……いや、お前はまだ俺たちとほとんど関わりが無い。王に話をつけるだけで帰れるかもしれないぞ」

「俺はすでに王国の人間と戦っているから無理だろう。それにこの髪は、特異なものなのだろう？」

ヴァルはしばらく考えた後に、答えを出した。

「分かった。協力してほしい、だがお前は戦えるのか？ はつきり言つて魔法がまつたく使えないのならただの足手まといだ」

「魔法というのは、俺のいた世界では、空想上のものに過ぎなかった。だから使えないだろう」

「そうか」

「だが身につけるまでだ。人間に不可能は無い」

「………そういう種族なのか？」

「そういう意味で言ったのではないが……」

「魔法はやるうとしてすぐにできるものではない。だが時間がかかるだろうが、不可能でもないだろう。まあ魔法は置いておくとして、この自治区の人間はおそらく1人残らずお前のことを怪しんでいるだろうから、俺もついていくし軽く挨拶回りでもいくか」

ミキヤも、町の人全員に怪しがられたままというのも居心地が悪いだらうと思いい、1つ返事で承諾し、建物をヴァルと一緒に民家のほうへと歩いていった。

建物は、現代のミキヤが良く知るような家というものに近いのだが、デザインは日本の和風というものよりは欧米風なデザインのものが目立っている。

屋根瓦は一切見かけることは無い。

町の人たちの服装は、地味なものが多く、女性にはワンピースタイプの服が多く、男性はズボンに上はシャツ、その上に皆デザインは微妙に違うが、赤い羽織りを着ている。

この赤色は、灼炎の民の自治区の人間であることを示し、王政と戦うという意味が込められている。

服自体は地味なのだが、ミキヤからすれば赤い髪が派手すぎて丁度良く感じられた。

「ヴァル、その黒いの大丈夫なの？」

黒いのはミキヤのことだ。1人の女性が、ヴァルに近づいてきて聞いた。

ミキヤのことを警戒してか、ヴァルの影に隠れてしまって、ミキ

ヤからは良く見えない。だが真っ赤で大きな瞳に真っ赤なロングの髪の毛。小顔で色白な綺麗な女性だ。

「ああ、大丈夫だ。今日からここに住むことになる」

「ミキヤと呼んでくれ、よろしくな」

ミキヤが一歩女性のほうに近づくと、女性は小動物のように後ろに飛びのいた。反射的だったようで少し恥ずかしそうにしながらもミキヤに近づいて、よろしくと返した。

「ファイアです……」

「まあ、ちよつと人見知りか激しいんだけどな。初対面の男はたいていこうだ」

ミキヤは気にしてもいないという感じで笑った。

彼らの会話を少し遠くで見ていた子供たちがいた。子供たちはどうもミキヤが危険な人物ではないと感じ取り、好奇心の塊となってミキヤのもとへやってきた。

「兄貴！ こいつ敵じゃないの」

「ああロツシュ、敵じゃない。味方だ」

「ミキヤと呼んでくれ、ロツシュで良いか？」

「全然良いぜー！」

本来全然は否定的な文に使うものであって、その使い方は間違っている、ミキヤは正そうととしてやめた。

何を言っても無駄そうな、すごい活気を感じたのだ。

赤い坊主にくりくりした赤い眼に、常に笑顔で元気な子供だ。

「それで君は？」

元気のありすぎるロッシュと一緒に、もう一人、女の子もやってきていた。

「セレスです」

セレスという女の子は、やはり赤い瞳に肩くらいの長さの赤い髪。花の髪飾りをした、おとなしそうな印象を受ける女の子だ。

セレスの笑顔は、ロッシュとは部類の違う、優しい笑顔だ。

「よろしくな」

「はい、よろしく願います」

異世界でも、人というのは変わらないもので、人と人とのつながりというのは同じものだといいことをミキヤは感じた。

最初に来たときには警戒されて、どうなるかと思っていたが、内心ミキヤは今安心している。

「そういえばミキヤ、お前家はどつする？ 別に俺の家でかまわないか？」

「ヴアルが良ければお願いしたい。別に野宿も慣れてるが、やはり屋根の下で寝れるに越したことはないのではな」

全員が、ミキヤのいた世界というのは貧しくて大変な世界だったんだ、と感じた。だが実際にはこの世界よりも安定していて、その中でも豊かな国で育っているのだ。

ただ野宿に慣れているというのは嘘ではない。修行の一環として、山奥で野宿することもたまにあったのだ。

「よし、決まりだな」

「イエエ！ 泊まってけ！」

今日から、ミキヤはヴァルの家に泊まることになった。

魔法の才能

ヴァルの家にて、時刻は深夜。時間の流れはミキヤのいた世界と同じで1日24時間である。

ヴァルの家は、ヴァルの母と弟のロツシユとヴァルの3人暮らしで、そこにミキヤが居候という形となっている。

突然やってきた黒髪の謎の男であるはずのミキヤのことも、ヴァルの母であるセレナは、ほとんど怪しがることもなく、ヴァルの大丈夫という言葉1つで信用しきってしまい、温かく迎えてくれた。

今はロツシユもセレナも眠りにについている。リビングにミキヤとヴァルが2人である。

「やはり、ダメージがあるか」

「ああ、あの野郎結構やり手だな」

先の戦いで、一度体を凍らされて、水の中に閉じ込められているヴァルは、それなのにダメージを体に受けていた。

「けどまあ、2、3日もあれば全快する。そんなに早くまた王国軍隊が来るとは思えないからな、そう心配することもねえさ」

「そうか、まあ体を大事にするのだぞ」

「ああ……で、お前どこに行くんだ？」

「日課なんぞな。気にしないでくれ」

ミキヤは木刀を持って、ヴァルの家の前に出てきた。日課というのは、一日に木刀を1000回振ること。忙しい用事があったりして、今日の日課を忘れていたミキヤは、深夜にそれを始めた。

静かな夜の町に、ブン、ブンと木刀が振られる音が響いている。

「んなことしてねえで、魔法の練習でもしろよ……」

ヴァルは眠たくなってきていた。

リズムよく聞こえてくる木刀を振る音が、子守唄のような効果になっていた。

「それも大事だが、これはもつと大事だな」

話しながらも刀がぶれることは一切ない。

剣の道を志すミキヤだが、ミキヤは一般的な剣道をやっているわけではない。ミキヤが剣術を習っていた道場は、競技としての剣道ではなく、真剣同士の命のやり取りを目的とし作られた真剣術を護身術として身につけるための道場だ。

ミキヤは実際に剣道の大会でも何度も賞を取っているが、それは本気の剣の戦いの中で身につけた圧倒的な力が、競技としての剣道をする者を圧倒的に上回った結果だ。

道場では、防具なし、真剣は使わないが木刀で打たれれば相当痛いし、骨が折れることもある。

一発が致命傷となる状況での戦いを毎日している人間と、防具をつけて、体の急所だけ打ち、守る剣道をしてきた人間では勝負にならない。

「それはミキヤの国の武器なのか？」

「少し違うな、これは練習に使うものであって、実際の刀は鉄で刃がついている」

「そのカタナというのは持ってこれなかったのか？」

「俺の国では武器を日常的に持っていることは許されていないからな」

「ふああああ……」

ヴァルは大きなあくびをした。そして家の壁にもたれかかってだるそうに言った。

「日が昇っちまうぞ」

「ヴァルは寝てくれ。俺は眠らないことに慣れているのでな」

ヴァルはミキヤはどんな暮らしを元の世界でしていたのかという疑問がどんどん大きくなっていくが、それよりも眠たかったので、ミキヤに一言言って家の中に入って、着替えて寝た。

ミキヤはそれから一振り一振り心を込めて木刀を振り続けた。

この時間は、昔は大変だったが、今のミキヤにとっては安らぎの時間でもあった。ひたすら剣を振り続けていく。

900回目を振るとき、まだ日は昇ってはこないが、寝るよりも起きていたほうがいい時間帯だった。

「今日は寝なくても良いか」

そして1000回を振り終わるころに、空が白み始めた。町にも人の動きを少しずつ感じるようになってくる。

ミキヤは木刀を腰のベルトに突き刺し、ヴァルの家に入った。

まだヴァルもロツシュも寝ているが、ヴァルの母のセレナはすでに目を覚まして、朝食の準備を開始していた。

ミキヤの良く知るキッチンの様子とは違うものだった。さすがは灼炎の民というのが、セレナはガスのコンロなど使わずに、魔法で熾した火を使って調理をしている。そもそもガスコンロのような機械は一切存在しない。

必要がないからなのか、それとも技術がないのか、ミキヤは図りかねたが、実際にはこの世界の機械技術は、ミキヤのいた世界よりも遙に劣る。

コンロのようなものはあるが、それも旧式で、都市部の貴族たちの家などにしかない。

「早いねえ、というか寝てないでしょう？ 大丈夫なの？」

「お気遣いどうも、俺は大丈夫です。寝ないのには慣れています」

「朝食はまだできないけど……」

「いえ、大丈夫です。少し外を散歩してきます」

ミキヤはセレナにそう伝えて、家を出た。

散歩とはいっても、ミキヤはこの土地勘など全くない。変に動き回って、また大蛇のような化け物と鉢合わせになっても困る。と

りあえず安全だろうと思われる民家のある辺りだけを歩き回ってみることにした。

やはり早朝なので、人とすれ違うことはほとんどなかった。ミキヤは歩き回っているうちに、円形の噴水がある広場にたどり着いた。噴水の中には、炎を手にともした人の像が置かれている。そこに知っている顔をミキヤは見つけた。

「おはようファイア。早いな、お前も散歩か？」

「お、おはよう……その、天気がいいですね」

「ん、そうだな。綺麗な空だ……」

この世界は、機械技術の進歩が遅い。それは機械をあまり必要としないからだ。

開発するための工場施設などが少ないこの世界の空は、おそらくミキヤのいた元の世界のどこで見る空よりも澄んで美しいものだ。注意して空など見ていなかったミキヤは、その美しさに心を奪われていた。

「……あの、ミキヤさん？」

「おおすまん。あまりに空が綺麗だったものでな、それとさん付けはよしてくれ。ミキヤでいい」

「イエエー！ おはよーミキヤ！ 飯だぜ！ ってこれは男女の神聖な儀にお邪魔しちゃったかつ、こりゃ失礼」

静かになっていた広場にロッシュが飛び込んできた。それを見て

冷静に挨拶を返すミキヤ、そしてそのすぐ近くにいるフィアは、ロツシュの発言で真っ赤になって慌てふためきながら否定している。それを見てロツシュにやついていたが、ミキヤは半場あきれたように説教を始めた。

「フィア、おはようと言われればおはようで返すものだ。何も赤くなることはないんだぞ」

「あ、ああ赤くなんてなってませんっ！」

そう言い張るフィアの顔は、やはり耳まで真っ赤になっている。ロツシュはその光景を見て、転げまわりながら爆笑していた。ミキヤの表情は、相変わらず呆れきっている。

笑い続けていたロツシュも、これにはさすがに呆れてしまった。

「ミキヤ、あんた絶対女泣かすタイプだよ……」

「何を、俺はそんなことはしない」

いつか絶対にすると思えて、ロツシュは仕方がなかった。この間フィアは必死でほてった顔の熱を冷まそうとしていた。

その後ロツシュに連れられてミキヤはヴァルの家に帰った。

朝食は、パンとスープにスクランブルエッグ。飲み物は牛乳。欧米の食事であって、ミキヤの好む和食ではなかったが、好き嫌いの

ないミキヤはそれをいただいた。

食事の前に全員が揃うという日本の文化はあるが、いただきますと手を合わせることはない。ミキヤはとりあえず1人で手を合わせていた。

「ミキヤ！ ミキヤは魔法使えねーんだろ？」

ロツシュが元気よくミキヤに質問した。それを聞いていたヴァルがロツシュを怒ろうとしたが、それをミキヤが穏やかに制する。事実だからだ。

「そうだな、俺は魔法が全く使えない」

ミキヤはなんでもないように言っただけだが、ヴァルがロツシュを怒ろうとしたのも当然のことなのである。

魔法とはこの世界では誰でもが使える、というよりも使えなければならぬ力だ。ミキヤの世界で言う一般教養というものだ。それをストレートに聞くのは、あなたはバカなのか？ と質問することと同じなのだ。

ただミキヤにしてみれば、魔法が使えるなんていうやつは危ないやつだった。おそらく使えても使えないというはずである。

「ふーん、じゃあさ！ 剣教えてよ！」

「ん？ 剣に興味があるのか？ いくらでも教えてやるが、俺の修行は厳しいぞ」

「どんなことするの！？」

「素振り1日1000回、さらに山にこもって1日戦い続けたりするな」

「ええー！？ そんなの無理だよっ！」

ロツシユの剣への思いは、ミキヤによって粉碎されてしまった。別にミキヤは剣の道をあきらめさせようと思ったのではなく、あくまで初歩的な修行の例を言っただけに過ぎない。実際にこれくらいのこととは当然のようにミキヤはやってのける。

「まあ、剣はあきらめろよ。な、ロツシユ。そんでミキヤはどうする？ 俺でよければ魔法の初歩くらいなら教えられるが」

「忙しくないならお願いしたい。俺も国と戦うのなら、魔法が必要となるようだからな」

「じゃあ飯食ったらすぐな」

「よろしく頼む」

ミキヤとヴァルは気持ち早く朝食を食べ終わり、家の前に出た。

「まあ、魔法を使うにはマナを集めることからだな」

「マナを集める。マナとはどこにあるのだ？」

「この地面にも大気にも、感じ取れるようになれば分かるんだがどこにでもある」

ミキヤは気配にはかなり敏感なほうである。町の中のどこかの民家が人が動き始めれば感じ取れる。ドアの前に誰かが立てば、すぐに分かるといった具合だ。

だがマナというそもそもの実態がつかめないものを感じ取ることが、ミキヤにとってもかなりの難題であった。

「……無理か？」

「ああ、無理だ」

「じゃ、しょうがねえ。ちょっと荒っぽいけど……」

ヴァルはそういつて手のひらをミキヤのほうへと向けた。

「魔法には大まかに分けて3種類ある。1つは属性魔法。ほとんどの魔法はこれだが、火や水などの力を持った魔法だ。そしてもう1つは特異魔法。ありとあらゆる魔法に精通し、応用が利き、ある程度の魔法力を持った者が偶然作り出すことがあるという、分類分けできない特殊な魔法だ。そして最後の1つは、魔法使いなら誰もができる簡単な魔法だ」

言いながらヴァルは少しずつミキヤに近づいていき、手のひらをミキヤの腹部に当てた。

「マナを集め、属性変換せずに直接撃ちだす直接魔法。形態には個人差があるが、特別な技術のいらぬ魔法だ」

ミキヤは腹部に何かピリピリとした、弱い静電気のような刺激を感じた。直後、衝撃を受けて後方に吹き飛んだ。ダメージはさほどないが、どんな打撃よりも重く感じる一撃だった。

「まあ撃ちだす必要性はなかったが、これが魔法だ。そして発動前に何か感じただろう?」

「静電気のような……」

「それがマナだ。それを感じ、集めることが第一ステップだ」

「よし、やってみよう」

ミキヤは精神を集中した。先ほどの静電気のような感じを探しているのだ。

分散している状態のマナは、相当集中しなければ感じることはできない。だがそれができれば後は集めるだけなのだ。

ミキヤは触覚以外を限界までシャットアウトして、全身でマナを感じることに専念した。

「……捕らえた」

「そうか！ 後はマナを集めるイメージだ」

大気中のマナを、イメージで視覚化し、集めようとミキヤは試みた。しかし、マナに自分の意思が届いているような感覚はする。マナが動き出すのは分かるのだが、なぜかミキヤには一切よってこない。

イメージを変えたりと、ミキヤは試行錯誤を繰り返したが、やはり結果は集まってこない。

「……？」

「……どうした？」

「俺に魔法は使えん」

「あきらめはええよ！ そんな簡単にできないっての。まあがんばれよ」

ヴァルは仕事があるといってどこかに行ってしまった。

その後もミキヤはマナを集めようとし続けたが、結局ほんのわずかなマナも、ミキヤの体に入ってくることはなかった。

そして、また日が落ち、ついには空が白み始めていた。

火力が足りない？

早朝の町には木刀が空を斬る音が響いている。
マナを集めるといふ修行に集中しすぎたミキヤが、日課である素振りを行っている。

「おー！ 早いねミキヤ！」

「ロツシュも早いな、どうした？」

「学校に決まってるじゃん！」

この世界にも学校というものがあることなどミキヤは考えていなかった。魔法を教えたりするのだからと、ミキヤは理解するが、自分の世界の自分の通う学校のことを思い出した。

この世界と同じ時間が流れているのなら、今はまだ夏休みのはずだから問題はない。しかし安心はできなかった。

異世界に飛ばされるなどというのは、どう考えても特別な非常事態なのだが、やはり早く帰らねばとミキヤは思った。

しかし、この国には夏休みがないのか、と思ったミキヤは、気温が高くないことに気づいた。

「この世界には四季はあるのか？」

「シキ？ なにそれ？ うまいの！？」

そもそも季節という概念がない。この世界の気温は年間を通して

一定だ。地域によって年中寒い地域、暑い地域がある。この地域は年中涼しく快適なところであるといえる。

季節についての説明は、面倒な上に無意味だと思いつるのはやめた。

「なんでもない。では行ってこい」

「いつてきまーす！」

元気よく走り出したロツシユの後姿を眺めていたところ、家から出てくる人がいた。ロツシユの兄のヴァルである。

「朝からよくやる、また寝てないだろ」

「おはようヴァル。だが成果は無しだ」

「そんなもんだ。俺だって最初からできたわけじゃねえ」

「いつごろからできた？」

「さーな。5歳くらいか」

一般教養であり、マナを感じるなどというのはこの世界では読み書きのようなものだ。ヴァルのようにこの世界の住人にすれば当然のことである。周りに常にマナの動き感じて生きているのだからだ。逆に18年もマナと無縁の世界に生きてきたミキヤは、完全にゼロからのスタートでありかなり難しい。

それからしばらくしてミキヤが木刀を振り終えた。

「終わったか、朝食の用意できてるから入ってくれ」

「待たせて悪いな」

「そんなことねえさ」

家に入ると朝食の匂いが漂ってきていた。やはり和食でなくパンである。米が大好きなミキヤはこの世界には米はないのかと少し不安にもなっていた。

ただこの世界のパンは、ミキヤのいた世界のものと比べてなんら遜色ない。むしろ各家庭巨大なオーブンで、それも火力に関してはプロである灼炎の民は焼き加減についてはミキヤの知るパンをはるかに超える。

「セレナさんは？」

「仕事だ。ちなみに朝食後は俺も仕事だ。ロツシユも学校で、この町に暇なやつはほとんどいなくなっちまうが、ミキヤどうする？」

「俺は1人でいるのも嫌いではないが、この町で俺は泊めてもらうだけで何も返すことができていないからな。お前の仕事とこのを見せてもらいたい。手伝えることがあれば、俺にも手伝わせてほしいのだが」

「やれることがあるかは分からんが、とにかく俺の職場に来るってことは良いだろ」

2人は朝食を食べ終わり、ヴァルは着替えてから家を出た。ミキヤは家の前で待っていた。

2人が向かったのは、ミキヤがこの世界にやってきて初日に、質問を受けた建物だ。あの建物は、灼炎の民の自治区の自警団兼魔法軍の拠点となる建物である。

町の実力者たちが集まってきた。

彼らの仕事は主に町の治安維持と、王国からの進軍などに対する対策をたて、敵が来れば迎え撃つことである。だから彼らは、特に仕事が必要ならば自らの魔法の腕を磨くことに専念する。

ミキヤとヴァルが建物の中の一室、ここは個室がいくつも用意されている。もちろんここで仕事をするヴァルの部屋は用意されてる。とりあえずミキヤもヴァルの部屋に入った。

「うむ、良い部屋だな」

「ここは職場だが俺の部屋みたいなもんだ。私物も置いてるしな」
従業員控え室のような場所だが、設備がすっかりしているため、泊まっている人もいる。

ヴァルはポケットから何か箱を取り出し、そこからタバコのようなものを一本取り出すと、指先に火をともして着火してくわえた。先から煙が出ている。やはりこれはタバコであるとしかミキヤは思えない。

「ヴァル、お前年は？」

「18だ」

「……そうか、俺もだ」

事も無げに言つてのけるところを見ると、この世界ではタバコというものは誰でもがすえるのか、もしくは年齢の制限制度がミキヤのいた世界とは違うのだと思われた。

「お前も一本どうだ？」

「いや、俺はタバコは吸わん」

「そうかい」

だがしかし、ミキヤの中でタバコは二十歳になってからである。制度がなくとも、吸うつもりは毛頭無かった。というよりもそんなに体に悪いものをわざわざ体内に入れるという行為自体がミキヤには理解の外である。

しばらくヴァルはタバコを吸いながら、ミキヤは木刀を見つめながら時間をすごしていたが、ヴァルがタバコを吸い終わるころに、部屋を誰かがノックした。

「入るよー」

「どーぞ」

声は女のものだった。ヴァルが了承するとドアが開けられた。彼女はやはり赤い髪に赤い瞳。そして髪の毛は肩くらいの長さで、パーマがかかっている毛先がクルクルと巻かれている。つり目で勝負気な印象を受けるが全体として整った美人である。

彼女はミキヤを見て目を輝かせた。ミキヤは退避しようとしたが、それよりも彼女の方が速かった。ミキヤは彼女に捕まってしまった。

「うわーっほんとに黒い！　すごいこれ自前なんだ！」

「おいルミ。やめとけ失礼だぞ」

ヴァルは一応の注意はするが止めようとするわけではない。ヴァルはルミが苦手なのだ。

「離せ」

「ちっちゃいよねえー、異世界の男の子ってみんなこんなのか？」

ミキヤは同世代の男子の中ではかなり小柄なほうである。身長は163cm。だが体重は平均ほどはある。それは比重の重い筋肉が体のほとんどだからだ。

だが外見からそれは分からない。筋肉はかなり細いタイプで、だから見ればミキヤはかなり小柄の普通の高校生である。

そして女性にしては結構高身長ルミは身長172cm。ミキヤは簡単にその腕の中に納まってしまふ。

ルミはミキヤの髪をワシヤワシヤと嬉しそうに弄っている。

「離せと言っている」

「かわいいっ」

ミキヤの言葉を無視して髪やら顔やらを弄りまくっているルミに対して、ミキヤはどうすることもできないでいた。力づくで抜けるわけにもいかず、こんなことで本気で怒るのもバカらしい。

結局脱出できないでいるミキヤをあえて見ないで、ヴァルは話を

進めようとする。

「ルミ、何か用なのか？」

「そうそう、今日非番でしょ？」

「まあ警備の仕事は無いが、いろいろ事務的な「じゃー修行付き合っ」て」

ルミはヴァルには警備の仕事は無いが、事務の仕事があることを知っていた。だがしかし、事務の仕事はヴァルが残業でがんばればいい。だから今は自分の相手をしると、かなり無茶苦茶なことを言っている。

ヴァルはそれを分かった上で、ルミは断っても聞かないことを理解しているから、仕方なく了承する。

「……はあー、分かった。じゃあ準備できたら行く……」

「はい」

ルミはわざとらしく高い声で返事し、部屋を出て行くこととした。だがそれに抵抗するのは捕まったままのミキヤである。

「待て、離せ！ どこまで連れて行くッ！？」

「いーじゃん、私の部屋だよー」

「ちよつと待て、ヴァル！」

ヴァルは目ですまないと伝えていた。その目を見たとき、ミキヤ

は抵抗は無意味であることを悟って、とりあえずあきらめることにした。

ずるずると引きずられて、ミキヤはルミの部屋に入っていった。

ボタン、と扉が閉じられた。

ヴァルはとりあえずポケットからタバコを取り出して、火をつけ、また吸い始めた。そして盛大なため息と一緒に煙を吐き出した。

「うわぁー、目も本当に綺麗に真っ黒だねー」

部屋にミキヤを連れ込んだルミにこれといった目的があったわけではなく、ただ単に気に入ったから引っ張ってきたというだけだった。

そうして連れてこられて椅子に座らされてるミキヤの目をルミは1分近く観察している。

ミキヤとルミの距離は10センチ無い。吐息がかかる距離にずっといられるので、ミキヤは結構戸惑っていた。

彼は、彼の世界での流行の言葉で言うところ草食系男子に分類される。なにせずと剣ばっかりと付き合ってきたのだ。男との真剣勝負での鏝競合いではなく、女とこの距離で顔を突き合わせた経験など無い。

「……俺からすれば……赤い眼は珍しいな」

「うーん、私はずっとこの色しか見てないしなあ」

「この世界にはいろんな目を持つ種族がいるのではないのか？」

ミキヤが問うと、ルミは少しだけ黙った後顔を離した。

「私、ずっとここにいるんだ」。実は魔法も全然ダメでね、ヴァルに教えてもらってるんだけど進歩しないんだ」

「はは、俺と同じだな。俺も魔法は俺もからっきしでな」

ミキヤが笑いながら答えると、ルミも笑った。

「へー、そうなんだ。私は小さな火しか出せないんだよね」

「俺はマナすら集められん」

ミキヤが言い切ると、ルミの顔から笑顔が消えた。マナすら集められないとは、この世界ではかなり深刻な状況として捉えられてしまう。

どんな顔をするべきかルミは少しの間思索し、結論が、

「お、お互いがんばらないとねっ」

「ああ、そうだな」

ルミは笑っしかなかった。ただぎこちない笑顔であったが、その意味も分からないミキヤには関係なかった。

しばらくの後、ミキヤのそろそろヴァルが待っているんじゃない

か？ という質問でルミはヴァルのことを思い出し、準備をしてミキヤと一緒に外に出ることとした。

ルミは知らず知らずため息をついていた。普段ならば男を疲れさせることを得意とするルミだが、逆に疲れさせられた経験はあまり無い。

ただ疲れたのはミキヤも同じであって、ミキヤの場合はルミという女性との距離感につかれきってしまった。初心な男子高校生であるからには仕方が無い。

そして2人はヴァルの元へやってきた。すでにヴァルは外に出て、本日3本目となるタバコを吸い終わるところだった。

「ヴァルー！ 待たせちゃった？」

「いや大丈夫だ。俺もほぼさつき来たところだしな」

「じゃー早速だけど、私の新しい魔法を見せることからいこっか」

張り切っているルミを傍目にヴァルはゆっくり移動しミキヤの横までやってきた。

「（悪いな、ミキヤに魔法教える時間ねえかも）」

「（それは良いんだが……この世界の仕事とはこつこつものを言うのか……？）」

「（それは勘違いだ）」

「ヴァルー！ 見ててよー」

「おう。見てるからやってみる」

ルミは目を瞑り集中して、指先に魔力を集めた。すると指先に小さな炎が燈る。

そして指を空に向けて指し、そこから一気に魔法を唱えながら振り下ろした。

「ファイアーアロー
火の鏃！」

ルミの指先の炎が一瞬にして膨れ上がり、形を矢のように変えて、そのまま指の方向から丁度90度曲がった方向へと飛び出した。それは丁度ミキヤとヴァルのいる位置だ。

あまりの予想外の方向への攻撃であったため、ミキヤはかるっじで反応できたがかわすことができず、ヴァルは何が起こっているのかすら分かっていなかった。

そんな2人の丁度顔と顔の間を火の矢は突き抜けていった。

「……不意打ちには使えそうな技だな」

ミキヤがルミの魔法について冷静に分析していると、ヴァルもようやく思考が追いついてきて、

「……お、おお……こりゃかわせないな」

と感想を述べていた。

そんな魔法を放った張本人は、顔を真っ赤にしながらごめんごめん、と笑っていた。あまりにも狙い通りに行かなかったのが恥ずかしかったようだ。

ストライクを取ろうとして一塁に牽制球を投げたのだから、不意

はつけるが恥ずかしいのも無理は無い。

「（ある意味……ミキヤよりこいつは魔法はダメだな……）」

「（というよりは、使わせてはいかんだろう）」

「聞こえてるんですけどっ！」

ルミはもう一度指先に炎を燈してミキヤとヴァルを狙った。2人はどうせまっすぐ飛ばないと高をくくっているが、ルミとしてはここは意地でもまっすぐ飛ばしてやらなければならぬのだ。

そんなルミの思いを乗せた火の矢は、案の定先ほどより酷く、180度後方、かろうじてルミには当たらなかつたが二塁への牽制球となつて飛んでいってしまった。

そして民家の建物の壁を焦がす結果となつた。

「もおお！ 何で！？ 火力が足りないの!？」

火力があれば今頃火事になっているぞ、とはヴァルもミキヤも言えなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6291i/>

木刀と破滅の使者

2010年10月17日19時08分発行